Memory of retrogression

琉叶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍｅｍｏｒｙ　ｏｆ　ｒｅｔｒｏｇｒｅｓｓｉｏｎ

【Ｎコード】
Ｎ４７５６Ｙ

【作者名】
琉叶

【あらすじ】
ちょっとした事故で記憶の殆どをなくしてしまった銀時。
覚えているのは松陽先生に会う前までの記憶。
その場に居合わせたは土方と沖田。
そして、会ったと直ぐに銀時の発した言葉は・・・・
「俺を・・・殺りに来たのか？」

条件反射って意外に良くあるよね？（前書き）

この話のタイトルは『Ｍｅｍｏｒｙ　ｏｆ　ｒｅｔｒｏｇｒｅｓｓｉｏｎ』

ー訳ー　逆行の記憶

何となく授業中に思いついた設定なので不定期的にですが連載していこうと考えました。

かなりの駄作ですが皆様の温かい目で見守ってやってください←

条件反射って意外に良くあるよね？

その日は何となく町をぶらついていた・・・・・・
けど、少し遠めに会いたくもない奴等の車を発見してしまった。

「んだよ、今日はついてねぇーなぁ」

頭をかきむしりながら溜息を吐く。
ふともう一度頭を上げてその車の方を見やれば、ボールを追いかけて一人の少年が車の前に飛び出していた。

「危ねぇっ！」

思わず体が反応していた。
何とか少年を腕に収め助ける事は出来た。
だが、助けたは良いが次の瞬間、頭に大きな衝撃が走った。

「土方さんいい加減タバコ止めてください。ったく、周りの迷惑考えろってんだ（チッ）」

「っるせーな。別に誰にも迷惑かけてねぇーだろうが！」

新選組のパトカーの中で何時ものようにくだらない喧嘩をしている二人。

土方は沖田の注意に気を取られ運転がおろそかになってしまっている。
そんな二人が乗っている車の前にボールが転がり出てきた。
だが、二人は気づかない。
子供がこちらに気が付く。
車が直ぐそこまで迫っていた。
ボールを拾い上げたその少年は、ボールを顔の前に出して次に来るであろう衝撃に身構えた。
が・・・・・・・・・
少年が車の前にいることに気づいたときにはもう遅かった。
もう土方達も駄目だと諦めた時。
「危ねぇっ！」
少年の姿は瞬く間にその場から消えていた。
銀色の光が車を横切る。
間一髪で誰かが身を挺して少年を庇ったのだ。
その少年を庇った者は大きな音を立てて向かいにあった電柱に頭をぶつける。
土方達は慌ててその者に駆け寄った。

条件反射って意外に良くあるよね？（後書き）

沢山感想来るといいな～
お気に入り登録とかもしてくれたらもう最高♪

「何か作者上機嫌だな」

「なんでももう一つ連載している話の方で沢山感想もらえた事が嬉しいそうですよ？」

「私たちを勝手な妄想で好きに動かしてるくせになんかムカつくアル！」

「まぁまぁ、そう言わないであげようよ」

目を開けたらそこは別世界！でも、気が付いたらそこはベッドの中（前書き）

いや～
さすがに一話だけだと元から何を言っているのか解らない私の話が
さらに特別解読班を用意しなければならなくなると思ったのであら
すじに出てきた部分まで書いて投稿してみました。

まぁ俺が・・・じゃなくて
私が書いた時点でもう意味が解らないものなんですけどねw

目を開けたらそこは別世界！でも、気が付いたらそこはベッドの中

頭が痛てぇ。

あれ？

どうしたんだっけ？

あぁそうだ、屍の足に躓いて扱けたんだった。

頭を押さえながら体を起こす。

直ぐ近くに声がする。

「あ、あの・・・」

その声は子供のそれだ。

その声の後に大人の声が聞こえた。

「あー、さっきは悪かったな、こっちも前を見てなかった。こいつのことは気にするな、死んだりなんかしねぇよ」

それを聞き安心したのか

「はい！」

と元気良く声を上げて走り去っていった。

足が遠のく音が聞こえて静かに目を開ける。

目を開けたそこに広がっていたのは

瞳孔の開いた目をしている黒髪ストレートの端正な顔立ちをしている男と、栗毛色のえらく可愛らしい顔をしたストレート髪の青年が目の前に立っている光景と、その男達の後ろに広がっているこの世のものとは思えない様な世界だった。

しばらくそれを見ていた俺は、その男達が俺に向かって足を踏み出したのに気が付いて警戒した。

そいつ等は全身黒い変な服を着て腰に刀をさしていた。

殺気は感じねぇ

だが・・・・・

俺は脇に抱えていたはずの刀に手をかける。

スカッ

ない！？

なぜ！？

そうこうしてるうちに目の前の男が俺を見下ろす。

めんどくさいけど聞いてみるか・・・

万事屋が子供を庇って電柱に頭をぶつけた。

めんどくせぇー奴に借りが出来たな・・・

俺は少し溜息を吐きながら万事屋に近付いていった。

総悟は俺がヤローになんと言われるか想像して後ろでニヤニヤして

やがる。

「あ、あの・・・」

銀時が庇った少年がヤローを心配そうに見て声を上げる。

「あー、さっきは悪かったな、こっちも前を見てなかった。こいつのことは気にするな、死んだりなんかしねぇよ」

それを聞き安心したのか、少年嬉しそうに顔を緩めて何処へともなく走り去っていった。

改めてやローを見る。

頭をさすって体を起こしたようだ。

少年の姿が見えなくなった頃、ヤローゆっくり目を開けた。

目を開けたかと思えば目を見開き辺りを見渡す。

周りを確認していたかと思うと俺達を見てなぜだか脇の辺りを手で仰ぐ。

ヤローはそれに慌てた様子を見せた。

だが、直ぐ様こちらに向き直ると仕方なしにと言った表情をして俺に一言信じられねぇー言葉を発っした。

「俺を、殺りに来たのか？」

目を開けたらそこは別世界！でも、気が付いたらそこはベッドの中（後書き）

こんな寄り道ばかりしててもう一本の方はうまく書けんのかな～

かなり心配です（汗）

よくあるあのドッキリとかってホント性質（たち）が悪いよね。いろんな意味で

本当に私は何が言いたいのでしょうか・・・・

できればこの話を詠んでくれた方々に聞いてみたいものです。

そんな滅茶苦茶な事出来るか！

これはあんたが書いてんでしょーがぁ！

などと言うツッコミが何処からか聞こえてきそうな気がしますが気のせいでしょうか？

気のせいですよね？

まぁ長々と申し訳ありませんでした。

では、本文をとくとご覧ください＾＾

よくあるあのドッキリとかってホント性質（たち）が悪いよね。いろんな意味で

周りの音が急に聞こえなくなったかのような錯覚が起こるほどその一言に驚いてしまった。

・・・・俺を、殺りに来たのか？・・・・

（コイツは何を言ってるんだ・・・）

しばらくの間、ヤローとの俺達との間に言い知れぬ緊張感の糸が張り巡らされていた。

以外にも、その沈黙を破ったのは総悟だった。

「旦那、変な冗談は止めてくださいよ。俺は土方さんならいつでも殺る準備はできてますけど旦那を殺る気なんてさらさらありませんぜ？」

さっきまでの言葉が聞き間違えであったかのように普段どおりの反応で対応する総悟。

ヤローはその言葉を聞き一瞬何かを考えていたかと思うと、直ぐに違和感を覚えた様な反応を示す。

俺達を見てから自分の手を見て驚いている。

（何してんだ？）

俺と総悟はヤローの変な行動を不思議に思いお互い顔を見合わせる。

総悟は小首をかしげヤローは何がしたいのか図(はか)りかねていると言った感じだ。

ほんの数十秒自分の手を見ていたヤローがこちらに顔を向けた。

そして頭をかきながら一つだけ可笑しな質問をする。

「あんたら、俺のこと知ってんの？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

思わず瞬きをしてしまった。

俺の少し後ろにいる総悟を見てみれば、目を白黒させて驚いていると言った感じだ。

（え、何？これドッキリなのか？ドッキリなんだよな？いや、でも・・・ないないない！
そんな事絶対無いって！だって本編の方でもそのネタもうやってたじゃねぇーか。
・・・・そうだよ、そうだよな。そんな事絶対無いっ！
だってもう過ぎ去った何年前かのネタだ。
万事屋は俺達の事をからかってるんだ、うん、そうに決まってる）

俺は混乱しかけていた頭をフル回転させある答えに行着いた。

ゆっくりと己の懐に手をいれタバコを取り出す。

俺の愛用Ｍｙライターマヨでその取り出したタバコに火をつけ心を落ち着かせた。

そして心の落ち着きと共に白い煙を肺から外へと吐き出す。

「てめぇーふざけてんのも大概（たいがい）にしやがれ。どうせそうやって俺達を貶（おとし）めるつもりなんだろ？諦めろ。今回の事は感謝するがだからと言ってお前に脅迫される筋合いはねぇーよ」

静かに奴の目を見て言った。

だがふと思う。

（ん？目が・・・死んでない？）

その事実に驚きヤローの顔を凝視してしまった。

ヤローは俺の視線に気づきさらに一言付け加える。

「何人の事じろじろ見てんの？そんなに銀髪が気にくわねぇーのか？」

普段のアイツなら必ず天パの方を気にかけて言ってくるはずだ。

だが違った・・・

ヤローはえらく反発的な態度とは相反し、その普段とは違う瞳には悲しみの色が深く刻み込まれていた・・・

よくあるあのドッキリとかってホント性質（たち）が悪いよね。いろんな意味で

「へーい！マ・ジ・カ・ル・バナナ♪
バナナと言ったら黄色♪」

「黄色と言ったらハーチミツ♪」

「蜂蜜と言ったら甘い♪」

「甘いと言ったらこの俺ぎーんさん♪」

「銀ちゃんといったら『マ・ダ・オ』♪」

・・・・・・・

「神楽？それ、どういう意味？」

「そのまんまの意味ネ」

銀時様・・・大層（たいそう）な言われようで・・・・（同）

「ねぇ何（同）って。もしかして同情か？同情のことなのか！？
・・・・ふざけるなぁー！」

人の目とか見ても死んでるとか死んでないとか実際はわからない（前書き）

もう嫌！

何が書きたいのか何を書いているのか全く分けわからんようなってしもうた。

これを見て？と思ったかとは本当にすんません←

自分でも？と頭の上でぐるぐるさせたいです。

人の目とか見ても死んでるとか死んでないとか実際はわからない

（なんだここは？てかこいつ等何？殺気は感じねぇーけどやっぱ俺を殺しに来たのか？てかなんで俺身体でかくなってんの？）

じっと自分を睨んでくる黒髪の男。

その視線が気にくわなくて思わず髪の事を言った。

だがあいつ等はさらに自分の顔を睨んでくる。

（なんなんだよコイツ。こいつ等も俺のこと鬼とか思ってるわけ？それとも・・・・・・）

ヤローは少し俯きながら一つ悪態をついた。

俺たちにではない、それに、ヤローは独り言のつもりだったのかもしれない。

「たく・・・・またあいつ等金で雇った奴らで俺を殺そうとしたのか・・・・・・

どうせ風貌の事なんか軽くしか説明しなかったんだろうな・・・・・・・・・」

その呟きはひどく悲しみを帯びているように感じた。
それからヤローは溜息を軽く漏らしながら周りを確認。
のちに俺たちに聞いてきた。

「ここ何処？あんた等が俺をここに連れてきたわけ？天人だらけって事はどこかの星か？一体いくらで俺を殺しに来るように言われた？後なんで俺の身体でかくなってるわけ？あんた等なんか知ってんの？」

その顔はドッキリや冗談などではない、いたって真面目なものだった・・・・

人の目とか見ても死んでるとか死んでないとか実際はわからない（後書き）

とどのつまりなにがしたいのか解らないので毎日自問自答ちゅうです。

この話しを見て皆さんは本当に面白いと思ってくださるのでしょうか？

ていうか話が短すぎ！

会話もかみ合ってないというかもうグダグダじゃん！

全てにおいてグダグダだの寒中水泳じゃん！

周りの皆さんの空気がほら冷たい！

あれ？

この例えなんかうまくない？

ねぇうまいよね？

なんて事を一人で言っています。

傍から見ればただの危ない人・・・・・

もう泣きたいです・・・・・

題名思いつかないときは適当に打ち込んでおけ！（前書き）

「全然先にすすまねぇな」

全く持ってそのとおりですねぇ。たく、ここの作者は何をしてるんだか（ハァ～）

「・・・・・・・・おめぇーがその作者だろうが！」

えへッ☆

題名思いつかないときは適当に打ち込んでおけ！

（・・・・・・ハァァァァァァァァァァァァ！？今こいつなんて言った？やっぱこれマジなのか？）

不覚にも思わず頭の中で叫んでしまった。

いつもなら「ふざけるなっ！」と刀を抜いている所だが、奴の顔はいたって真面目そのもの。

これはもうほぼ確定で間違いないのだが、最後の悪あがきといった所で一応確認を取ってみた。

「え・・・っと・・お前、自分の名前・・・・解るか？」

俺は最後の希望をこの質問に託したが、その希望はあっけなく散ってしまった。

「お前等馬鹿？あいつらに捨てられ名前すら覚えてねぇ筈のこの俺にそんな事聞くか普通」

（ん？あいつ等？あれ、確か記憶喪失ってのは記憶を失うもんで・・・・・・）

俺が一人考え込んでいたのを一人楽しげに見ていた総悟だが、銀時のこの様子にさすがに何かを感じたのだろう、俺の方を馬鹿でも見るような目で見ていた奴に一つ確認を取る。

「旦那、自分の歳・・・わかりやすか？」

銀時はそれを聞きますます俺たちを馬鹿でも見るような顔になった。

そして、総悟の質問に答えようとしないでその場を立ち去ろうとする。

「お、おいちょっと待て！」

この場を立ち去ろうとするヤローの肩を掴み引き止める。

ヤローは肩を掴んだ俺の方にゆっくり顔だけ向け殺気を飛ばした。

「俺を殺しに来たんじゃなかったのかよ？お前等から殺気は感じられないから大人しくしてやってんのに変な質問ばっかしやがって・・・殺すきねぇなら俺の身体早く元に戻せよ。そんで、あいつ等に言っとけ、てめぇーで生んだのに殺そうとすんなクソババァってな」

その目は深い憎しみの炎をたぎらせている様に感じた。

（ん？・・・・・ちょっと待て！身体を元に戻す？こいつ、何言ってやが・・・・・）

その本人の言葉によりすぐに解消される。

「もういいから身体だけ直せよ。大人の身体なんて違和感ありすぎて気持ち悪いんだよ・・・」

頭をかきながら言う姿は何時ものアイツ、だが、今言った大人の身体って・・・・

その結論に辿り着けば、今まで奴が取った行動の殆どに納得がいった。

題名思いつかないときは適当に打ち込んでおけ！（後書き）

教えて！銀八先生！

「はーい。今日はやる事が無いのでこれでおわりまーす」

「きりーつ、例、着信ボイス」

「面白くなかったので次からは〇〇〇というよーに」

「・・・・何がしたいの？」

困った時に限って厄介な人間が出てくる（前書き）

銀時「なんで良い事をした筈なのにこんな目にあうんだよ・・・」

土方「知るか」

沖田「知るかって土方さん、あんたが余所見をしなければ旦那がこんな目にあってませんでしたぜ？」

銀時「そうだそうだ。この全ての原因は多串君にある。なんで記憶喪失装って金を沢山せしめてやろう！」

沖田「それはいい考えです旦那。どうせなら汚名も着させてやるってのはどうですかぃ？」

・・・・・・フルフルフル

土方「ざけるのも大概（たいがい）にしやがれぇぇぇぇぇ！」

困った時に限って厄介な人間が出てくる

「・・・旦那。俺たちは旦那の身体に何もしてやせんぜ？」

総悟がヤローの言葉に一瞬瞬きをしたが、とりあえずヤローが勘違いしている事を諭(さと)そうとする。

「その身体が今の旦那のものでさぁ」

ついに言った。

ヤローを見れば、先程の総悟と同じように瞬きをしている。

よほど驚いたのか、深い溜息を頭を掻きながら漏らしている。

そしてこっちを見て同情をした時のような色をその顔にかもし出す。

「えっと・・・なぁ、あんた等ここに来る前に頭とか打たなかった？」

「その身体が今の旦那のものでさぁ」

（ハ？）

思わずその言葉が口をついて出てきそうになってしまった。
俺は何度か視界を閉じて冷静さを保とうとする。

（ハァ～こいつ等大丈夫かよ・・・・・）

頭が何とか冷静さを取り戻す。
その後に俺は何故か目の前の連中の事を心配してしまった。

「えっと・・・なぁ、あんた等ここに来る前に頭とか打たなかった？」

何とか相手を気遣うような視線を向けないように注意して、その言葉を目の前の連中に言った。

それを聞いて、茶髪の方の男がまたしても突拍子もねぇ事を言う。

「頭を打ったのは旦那の方でさぁ。旦那、もう一度聞きやすが旦那の歳はいくつですか？」

・・・・なんでこんな時にそんな事を。

確かに頭には何故か痛みを覚えるが俺は正常だ。

とりあえず、目の前の奴が真面目な顔で俺の顔を見ているので先程の質問に答えてやる。

「しつけ～なぁ。歳は五～七ぐらいじゃねぇの？」

仕方なしにと俺の歳を教えてやれば、あいつ等はお互い顔を見合わせ頷(うなづ)きあった。

困った時に限って厄介な人間が出てくる（後書き）

いきなり変な事を言ってくる奴にも何かしら理由と言うものがあるに違いない！

短くてすみませんっ！！

しかも二日も間をあけてしまって・・・

これからもこのような事がある可能性大です。

本当にすみません（汗）

なんか最近謝ってばっかじゃね？

いきなり変な事を言ってくる奴にも何かしら理由と言うものがあるに違いない！

頷きあった二人は静かにこちらを向き、信じがたい事を言った。

「お前は今、記憶喪失になってるようだ」

その言葉を聞いたときの俺の反応はこうだ。

（何？記憶喪失って何？てか記憶？過去を忘れるとかか？俺ちゃんとかこのこと覚えてるぞ？何訳のわからない事を・・・こんな嘘を言って俺を油断させようと言う作戦かなんかか？）

いきなり訳の分からない事を言われた上に、前にいる連中は全くの他人。

知り合いですらないのでそんな失礼気回りない事を思った。

その表情は目の前にいる連中を馬鹿にするような目付きだったのではないかと思う。

すぐにその目には警戒の色が浮かぶ。

そりゃ当然の反応だと思う。

今まで散々命を狙われてきた。

それこそあんな手こんな手で・・・・

その為今回のこれも何かの作戦か何かだと思ったのだ。

俺たちは信じられないが、今目の前にいるヤローは五～七歳以降の記憶がなくなってしまったらしい。

総悟と俺は顔を見合わせ目で合図をした。

ヤローにこの事を言って見れば案の定・・・

俺たちを馬鹿でも見るような目で見てきた。

だが、その後すぐに警戒しているような色をその紅(あか)い瞳に浮かべる。

俺と総悟はそれに驚いたが、すぐに誤解を解こうとした。
そう、俺達がただ馬鹿を言っているという誤解を・・・

「信じられねぇ様だが本当だ・・・現に俺たちは記憶を失う前のお前を知っている」
そう言ってしばらくして、奴は少しだが警戒を薄めた。

「記憶を失う前の俺？それは今の本当の『俺』と言う意味か・・・？」
「そうだ」
「今の俺は本当に大人だったと・・・？」
「あぁ」

そこまでは俺を疑うような眼差(まなざ)しで見ていたヤローだったが、二番目の質問の答えを聞き終えたところで、最後の薄い警戒をといた。

俺は色々と今までにあった為、人の考えている事とかを悟るのが当然のようになっていた。

だから相手が嘘をついていればすぐに解る。

目の前の奴の《眼》は嘘をついている時の目ではない。

俺はそれを感じ、最後に残していた警戒をといた・・・

いきなり変な事を言ってくる奴にも何かしら理由と言うものがあるに違いない！

「今週のアニメ銀魂面白かったよな～」

「うむ。あの時のカードはさすがのこの俺でもやばかったぞ・・・」

「ヅラ、お前自分で宇野強いとか言ってるわりに弱いよなっ」

「ヅラじゃない！桂だ！それに俺は弱くなんかない！現にこの間だって俺が勝ったではないか！」

「あれぁ俺が手加減してやったに決まってんだろ？」

「なに！？
では俺はエリザベスだけでなく昔の戦友にまで騙されていたのか！？」

「ヅラはそういうとこがまっこと鈍いからの～アハハハハハ！！」

意外な事実を知り、それからしばらくの間はあの
「俺は強いぞ～」
というセリフを宇野では口にしなくなったとか・・・w

サブタイって考えるのめんどくさくない？（前書き）

更新遅れてすみませんでした←

ていうかついにお気に入り登録十人だよ十人！！

やばいよ嬉しいよ！

どうしよ、ニヤニヤが止まんないｗ

サブタイって考えるのめんどくさくない？

「教えろ」

「「ハァ？」」

警戒を解いたかと思えばまた意味の解らない事をほざきやがる目の前の男。

俺達が「何を？」ていう表情でも浮かべていたのだろうか、より詳しく何を教えて欲しいのかを言うヤロー

「この時代の事と俺の情報だよ。他に何があるってんだ？」

まるで俺達を挑発してくるような言い方は今の対して変わらない。

俺は思わずキレかかりそうになった。

が、なんとかそれを耐えて見せた。

（落ち着け、落ち着け・・・・相手は一応ガキなんだ。ここは大人の余裕を・・・）

だが、後ろから聞こえてきた言葉に俺は我慢の限界を超えたのだろう、何の迷いもなくキレてしまった。

「犬の餌ばっかり食ってるから頭が油まみれになるんでぇ」

ブチッ

「総悟！おめぇも「ハァ？」とか言ってたじゃねぇか！
てかマヨネーズを犬の餌呼ばわれるんじゃねぇぇぇぇぇ！！！！！」

総悟に剣を振りかざそうとしていた後ろでは、マヨネーズという言葉を聞いて小首をかしげている奴の姿があったとかなかったとか・・・

場所は真選組屯所

「万事屋が記憶喪失って本当か！？」

「旦那が記憶喪失って本当ですか！？」

襖を勢い良く開けて入ってきた近藤さんと、その後を付いて走ってきた山崎の大声が部屋に響き渡る。

俺はとっさに耳を押さえる。

まだ耳がキーンと言っている。

万事屋のヤローは対応に遅れたのか固まってしまっている。

「旦那大丈夫ですかぃ？」

総悟が面白半分でヤローの顔の前で手をひらつかせる。

だが反応がない。

総悟は何を思ったのか銀時の頭を掴もうとする。

サッ

瞬間、ヤローは凄い速さで後ろに飛びのき総悟から離れる。

そして冷めた目で総悟を見て言う。

「てめぇ、俺の頭を掴んで投げ飛ばそうとか思ったろ・・・」

それを聞いて肩を竦(すく)める総悟。

どうやら図星のようだ。

（総悟はだから頭を掴もうと・・・・）

一人そんな事を納得していると、総悟が驚いたとばかりに目を大きく見開き、ヤローに一つ質問をした。

「旦那、俺が頭を掴んで土方コノヤローに投げようとしていたのをよく解りやしたねぇ～」

途中変な言葉が聞こえたが、確かにあの動きは以上だった。

総悟の言葉を聞きこの部屋にいる全員が、ヤローをに目を向けた。

サブタイって考えるのめんどくさくない？（後書き）

「白銀の生き様ってあのヤローを中心に書かれてるよな」

「そうですねぇ」

「これも一応真選組出てるけど、なんか悪役っぽくね？
子供引きそうになった挙句ヤローを記憶喪失とかにして・・・」

「何言ってんですか土方さん。
悪役なのは土方さんだけでさぁ」

「総悟。お前、俺に恨みとかでもあんのか？」

「いえ、恨んでなんかいませんって＾＾
恨みの代わりに殺意はありますけどねぇ～」

「・・・・（ヒクヒク）笑」

「・・・・（ニヤリ）笑」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4756y/

Memory of retrogression

2011年11月22日02時53分発行